

発育による閉塞性黄疸と急性脾炎と診断。診断後、MMC、ADMの動注と放射線療法（Co: 4800rads）にて胆道内の鑄形状の腫瘍は一時消失したが、再々胆道内に腫瘍が出現するため、入院9ヶ月後、肝右葉切除術施行、（肝硬変（一）、S<sub>5</sub>に3×4.5cmの腫瘍）。AFPは15ng/mlと正常化するも切除3ヶ月後、肝左葉に3ヶ所転移巣出現。エタノール注入療法（合計115ml）施行するも効果なく、再度、ADM・リピオドールエマルジョンを動注したところ、腫瘍内にガス像が出現し、AFPの低下を認めた。入院後、集学的治療により約18ヶ月生存中の示唆に富む胆道内発育型肝細胞癌を報告した。

17) CDDP リピオドールエマルジョンによる肝細胞癌の治療

鈴木 裕・市田 隆文  
畑耕治郎・五十嵐健太郎  
早川 晃史・上村 朝輝  
朝倉 均 (新潟大学第三内科)

リピオドールが肝細胞癌組織に選択的に集積する性質を利用して、1988年よりCDDPリピオドールエマルジョンを肝細胞癌の症例20例の治療に応用してきた。現時点では症例数、観察期間共に少なく、治療効果の点で従来の他療法と比較しうるまでには未だ到っていないが、副作用についてはCDDP全身投与の場合にみられるような重篤な副作用は認められなかった。一症例として肝細胞癌を発生した肝硬変患者（58才、男性）に選択的にCDDPリピオドールエマルジョン7mlの動注、及びTAEの併用を2回行ったところ、術後AFPは順調に低下し、血管造影の所見も合わせ本療法の効果があったと考えられた。今後、症例を重ね詳細に評価を進める必要がある。

18) 教室における腹部悪性腫瘍に対する温熱療法の抗腫瘍効果に関する検討

曾我 憲二・樋口 庄市  
八木 一芳・相川 啓子 (日本歯科大学新潟)  
豊島 宗厚・柴崎 浩一 (歯学部内科)

話題提供

非A非B型肝炎とHCV抗体

新潟大学第三内科

上村朝輝

米国Chiron社の研究グループにより1988年非A非B型肝炎ウイルスゲノムの分子クローニングが成功し、ベクターに発現させた抗原蛋白に対する抗体反応（HCV抗体）を臨床的に血清材料で検索が可能となった。そこで教室における各種非A非B型肝炎疾患についてELISA法によるHCV抗体の測定を行った。

その結果、輸血後肝炎62例中46例（74.2%）、散発性急性肝炎25例中5例（20.0%）、慢性肝炎57例中49例（86.0%）、肝硬変8例中3例（37.5%）、肝細胞癌45例中39例（86.7%）、自己免疫性肝炎8例中1例（12.5%）、PBC46例中5例（10.9%）にHCV抗体が陽性であった。またHCV抗体陽性の慢性肝炎49例中24例が輸血歴を有していた。このようにHCV抗体は輸血後肝炎および非A非B型慢性肝疾患に高率に陽性となり、散発性急性肝炎、自己免疫性肝炎、PBCなどでは低率であった。HCV抗体の出現状況から、C型肝炎は輸血による感染が多い一方、輸血以外の経路による感染と思われる慢性肝疾患も含まれていることが示唆された。